

「日本のことば遊び」

群馬県立女子大学教授 北川和秀

1、万葉集に見える例

よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見

淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三

(一・二七) 天武天皇

来むといふも来ぬ時あるを来じといふを来むとは待たじ来じといふものを

(四・五二七) 大伴坂上郎女

鑑子に湯沸かせ子ども櫛津の檜橋より来む狐に浴むさむ

さしなべに、湯を沸かせよ、人々よ。櫛津の檜橋を渡つて、コンコンと鳴いて来る狐に浴びせてやろう

右の一首は、伝へて云はく、一時に衆集ひて宴飲しき。時に夜漏三更にして、狐の

聞ゆ。爾乃衆諸興麻呂を誘ひて曰はく、この饌具、雑器、狐の声、川、橋等の物に關けて、但に歌を作れといへれば、声に應へてこの歌を作りきといふ。

(一六・三八二四) 長意吉麻呂

霍公鳥を詠む二首

霍公鳥今来鳴き始む首蒲蘆くまでに離るる日あらめや

(一九・四一七五) 大伴家持

わが門ゆ鳴き過ぎ渡る霍公鳥いや懐かしく聞けど飽き足らず

(一九・四一七六) 大伴家持

尼の、頭句を作り、大伴宿祢家持の、尼に詠へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首

佐保川の水を塞ぎ上げて植えし田を 刈る早飯は独りなるべし

(八・一六三五) 尼 + 大伴家持

* にひはり 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる (古事記歌謡二五)

日日並べて 夜には九夜 日には十日を (古事記歌謡二六)

… み山には 射目立て渡し 朝狩に 十六履み起し 夕狩に 鳥踏み立て

(六・九二六) 山部赤人

若草の新手枕を枕き初めて夜をや隔てむ

(一一・二五四二)

… 敏馬の浦の 沖辺には 深海松採り 浦廻には 名告藻刈る 深海松の 見まく欲しけど 名告藻の 己が名惜しみ 間使も 遣らずてわれ

は 生けりとも奈重二(六・九四六) 山部赤人

たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠り 馬声 蜂音 石花 蜘蛛 荒鹿 妹に逢はずして

(一二・二九九一)

斯くしてやなほや守ら牛鳴大荒木の浮田の社の標にあらなくに

(一一・二八三九)

誰が園の梅にかありけむ幾許も咲きにけるかも見が欲し左右手に

(一〇・二三二七)

… わが着たる 衣は穢れぬ 見るごとに 恋はまされど 色に

山上復有山ば 人知りぬべみ… (九・一七八七) 笠金村

百濟野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯 鳴尔鷄鷓鴣

(八・一四三一) 山部赤人

百濟野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも

言云者 三々二田八酢四 小九毛 心中二 我念羽奈九二

(一一・二五八一)

言にいへば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに

2、竹取物語に見える例

駿河の国にあなる山の頂いただきにもてつくべきよし仰せ給ふ。……御文ふみ、不死の薬の重ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。そのよしうけたまはりて、つはものどもあまた具して山へ登りけるよりなん、その山をふじの山とは名づけゝる。その煙けぶりいまだ雲のなかへたち上るとぞ言ひ伝へたる。(末尾)

3、古今集に見える例

【懸詞(掛詞)】

波が立つ

風ふけば沖つしら浪たつた山夜半よはにや君がひとり越ゆらむ(九九四)

龍田山(地名)

行く野

踏みもみず

*大江山いく野の道の遠ければまだふみもみず天橋立(金葉集五五〇)

幾野(地名)

文も見ず

【物名歌】

いさゝめに時待つ間にぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつゝ(四五四)
(かりそめにその時を待っているそのあいだに、日は経ってしまった。わたくしの気持をあなたの方にたびたび見えるようにしていながらも。)

*笹、松、枇杷、芭蕉葉をよみこむ

【文字遊び】

吹からに秋の草木のしほるればむべ山風をあらしといふらむ(二四九)
(吹くとともに秋の草木がしおれるので、なるほど山風を「あらし」と言うのだろう。)

4、伊勢物語に見える例

【折句】

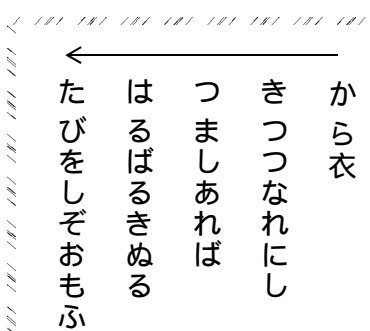
むかし、をとこありけり。そのをとこ、身をえうなき物に思ひなして、京にはあらし、あづまの方に住むべき国求めにとて行きけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道知れる人もなくて、まどひいきけり。三河の国、八橋といふ所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水ゆく河の蜘蛛手なれば、橋を八つわたせるによりてなむ八橋といひける。その沢のほとりの木の蔭に下りみて、乾飯かれいひ食ひけり。その沢にかきつばたいとおもしろく咲きたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五文字を句の上かみにすゑて、旅の心をよめ」といひければ、よめる。

から衣きつゝなれにしつましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ

とよめりければ、皆人みな、乾飯かれいひのうへに涙おとして

ほとびにけり。(第九段)



5、土左日記に見える例

藤原のときざね、ふなぢなれど、むまのはなむけす。(一一月二二日)

かみなかしも、酔ひあきて、いとあやしく、しほうみのほとりにて、あざれあへり。(一一月二二日)

ありとある上下、わらはまで酔ひ痴れて、一文字をだにしらぬ者しが、足は十文字に踏みてぞあそぶ。(一一月二四日)

6、その他の文献に見える例

【回文】

むら草に草の名はもし備はらばなぞしも花の咲くに咲くらむ

(『奥義抄』「草花を詠む古歌」)

* 『奥義抄』は平安後期の歌論書。

長き夜の十(あるいは遠か)の眠りの皆目覚め波乗り船の音の良きかな

(なかきよのおのねふりのみなめさめなみのりふねのおとのよきかな)

* 江戸時代に、よい初夢を見るように枕の下に入れた宝船の絵に書いてあった歌。この歌は中国で万曆二十年(一五九二)刊行の『日本風土記』

にも見える。

目をとめよ梅かながめむ夜目遠目(『毛吹草』「廻文之発句」)

* 『毛吹草』は、正保二年(一六四五)刊行の俳書。

7、比較的新しいことば遊び

なぞなぞ

・ 上は大水、下は大火事、何だ？

・ 鳴門海峡で船が難破しましたが、赤ん坊だけが助かりました。なぜ助かったのでしょうか？

三段なぞ

・ ゆがんだ松とかけて何と解く 郵便屋さんと解く その心は？

地口

・ 下戸にご飯(猫に小判)

無駄口

・ 恐れ入谷の鬼子母神、その手は桑名の焼蛤、結構毛だらけ猫灰だらけ、たいしたもんだよ蛙の小便、何か用か九日十日、驚き桃の木山椒の木、

蟻が十匹ありがとう、敵もさる者引つ掻く者、

飛んでもハツブン歩いて十六分